

14 北陸地方の鬼瓦

今井 晃樹

A はじめに

北陸地方における鬼瓦の出土例は石川県（加賀国・能登国）を除いて確認できなかった。以下、出土例について概述する。

B 石川県の鬼瓦

i ニッ梨豆岡向山窯

小松市ニッ梨町に位置する。同遺跡は、6世紀から10世紀と12世紀末から14世紀までの土器・陶器生産遺跡群である南加賀窯跡群を構成する窯跡群の1つである。発掘調査では計12基の窯跡が確認され、そのうち10世紀前半の窯跡では須恵器を主体として軒瓦も出土することから、瓦陶兼業窯であることがあきらかになった（石川県小松市教育委員会2005）。

鬼瓦はB地区の7号窯から出土している。破片は全部で10数点出土しており、部位が重複することから、複数個体あるとみられる。第1図の1と2は同範であり、3もおそらく同範であろう。焼成の状態も類似する。第2図の1は図1の1～3をもとに復原したもので、高さは52cm、幅38cm程度の大きさとなる。

鬼面は全体に盛り上がり、眉、目、鼻、頬、牙の表現が認められる。鬼瓦外縁に珠紋はみられず突帯がめぐる。外形は全体に方形で、頭頂部が山状に突出する。頭頂部にキザミをいれて装飾するのは珍しい。

文様面には木目を残すものがあり範（木型）による成形であろう。成形技法は、最初に眉や目など顔の突出部に粘土を詰め、その後、粘土塊あるいは板状粘土を何回かに分けて継ぎ足して全体を成形する。裏面の縄タタキは、最後にタタキ締めて粘土を圧着させたものであろう。第1図の1の裏面拓本には棒状工具で突いた痕跡がみられる。

鬼瓦の時期は文様や共伴する須恵器などから10世紀前半と考えられる。本窯出土の鬼瓦が、後述する高尾廃寺の鬼瓦と同範の可能性があり、生産地と消費地の関係も示唆されている（石川県小松市教育委員会2005）。

ii 能登国分寺（国分廃寺）

七尾市国分町・古府町に位置する。調査によって、法起寺式の伽藍配置であることが判明している。7世紀後半から平安時代にわたる複合遺跡である。寺の変遷は、7世紀後半から8世紀前半ごろに創建された先行寺院（国分廃寺＝大興寺）と、承和10年（843）に定額大興寺を転用してできた国分寺とに大別できる。

鬼瓦の脚部と思われる破片が1点出土している（第2図2）。残存部分は5cmほどと小さく、文様面には菱形の突起と鬼瓦の外縁の珠文がみられる。側面や底面にはハケ目調整がみられるほか、裏面には指頭圧痕がのこる。また、木目の痕も認められることから、範（木型）による成形と考えられる。焼成は堅緻で青灰色を呈する（石川県七尾市教育委員会1986）。

当遺跡からは、白鳳時代から平安時代にわたる土器、瓦が出土している。鬼瓦は細片であり、文様部分も不明瞭であることから、鬼瓦の時期を特定することは難しい。

iii 加茂廃寺

河北郡津幡町に位置する。この遺跡ではかつて、軒瓦や瓦塔が出土している。平成15・16年度に実施した第5調査区発掘調査では礎石建物を確認し、建物周辺から軒瓦、鴟尾、鬼瓦が出土した。また、礎石建物北の北大溝からは「鴨寺」と墨書された須恵器が出ている（津幡町教育委員会2007）。

鬼瓦は小型だがほぼ完存している（第2図3）。高さ21.6cm、幅17.7cmを測る。鬼面は眉、突出する目、鼻、鼻の両脇から左右に伸びる巻き毛、上顎部の歯牙が表現される。鬼面の周囲には大きめの珠文が飾られ、外縁は断面三角形の突帯をめぐらす。裏面には釘穴や把手などの固定部位は見当たらない。特徴的なのは、下半部の割りが円形で下辺が閉口すると考えられる点である。通常は、割りの部分に棟先端の軒丸瓦が接するが、閉口するとすれば、通常とはことなる設置法を想定しなければならない。

同調査区から灰釉の鴟尾が出土していることから、この鬼瓦は降棟に使用したと考えられる（津幡町教育委員会2007）。共伴する軒瓦や鬼瓦の文様からみると、鬼瓦は平安時代前期頃の可能性が高いであろう。

iv 高尾廃寺

加賀市高尾町に位置する。周辺には、宮地廃寺、弓波廃寺、津波倉廃寺、保賀廃寺のほか、黒瀬瓦窯などの遺跡が確認されている。これらの遺跡は出土遺物から白鳳時代と考えられているが、高尾廃寺は後述するように時期が降ることがあきらかになっている。

鬼瓦は計3点出土した。第2図の4・5は目の部分で、4は上下2段に別れ突出しており、径は9.7cmある。5は鬼瓦の側面が残存する。6は上唇および歯牙の部分が残る。5の表面には木目の痕跡がのこることから、範（木型）で成形したことがわかる。鬼瓦下半

の割りが非常に浅いのも特徴である（加賀市教育委員会 1980）。

高尾廃寺から出土した土師器は平安時代中期（10 紀中葉～後葉）とみられ、共伴する軒瓦についてもおよそ年代が一致するので、鬼瓦も平安時代中期と考えられる。この鬼瓦は、近隣の二ッ梨豆岡向山窯 7 号窯出土の鬼瓦と同範の可能性もあり、高尾廃寺の瓦は二ッ梨豆岡向山窯で焼成された可能性を指摘する考えもある（石川県小松市教育委員会 2005）。

C まとめ

北陸地方における鬼瓦は出土数が少なく、石川県にのみ、その存在を確認することができ、旧加賀国と能登国にそれぞれみられた。したがって、現状では北陸地方全体を評価する状況にはない。鬼瓦の時期は共伴遺物や鬼瓦自体の文様などから見る限り、能登国分寺を除いていずれも平安時代のものである。しかし、北陸地方には 7 世紀後半まで遡る古代寺院が複数存在していることから、将来、より古い時代の鬼瓦が出土する可能性もあるだろう。今後の発掘調査の進展を期したい。

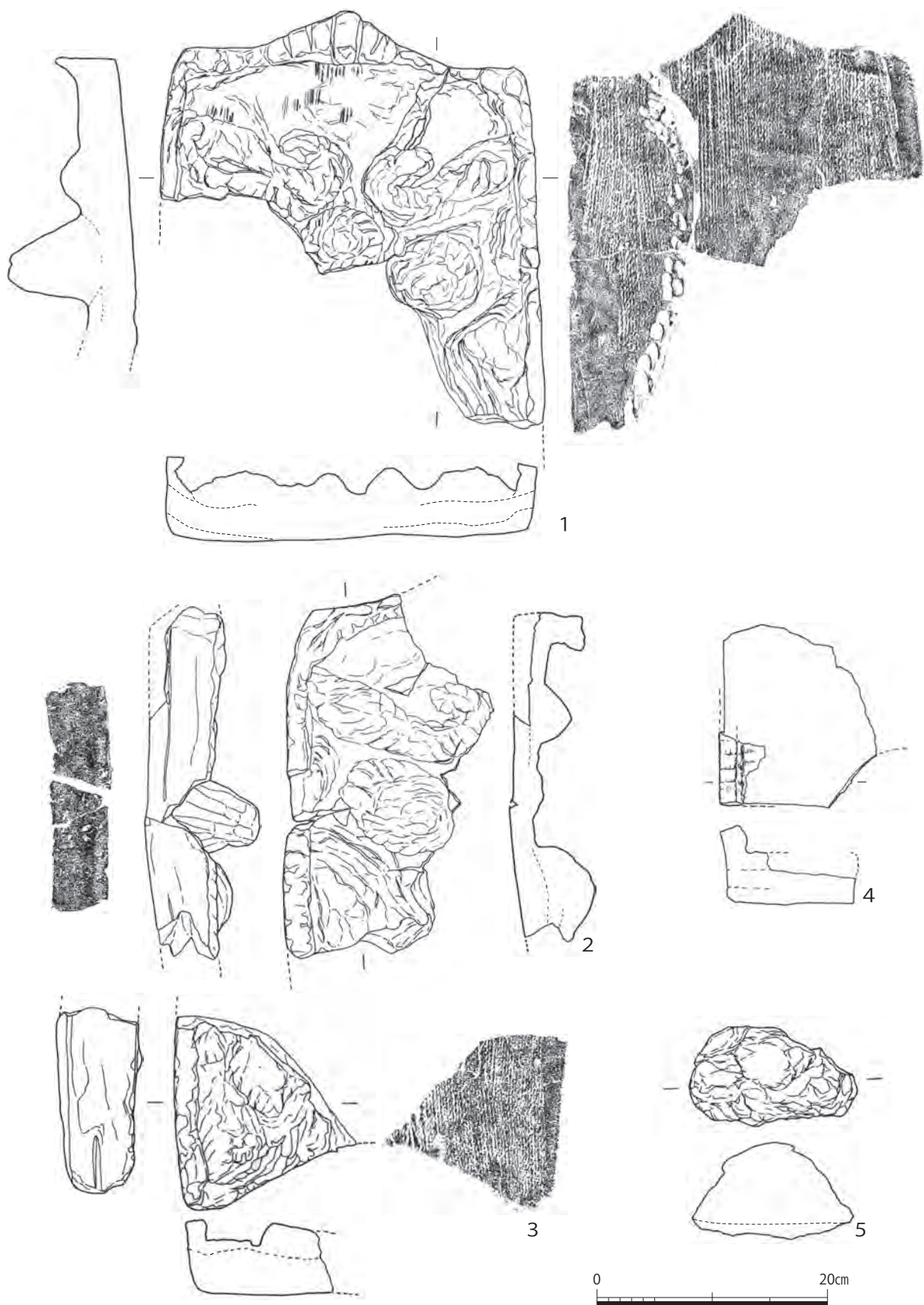
（奈良文化財研究所）

参考文献

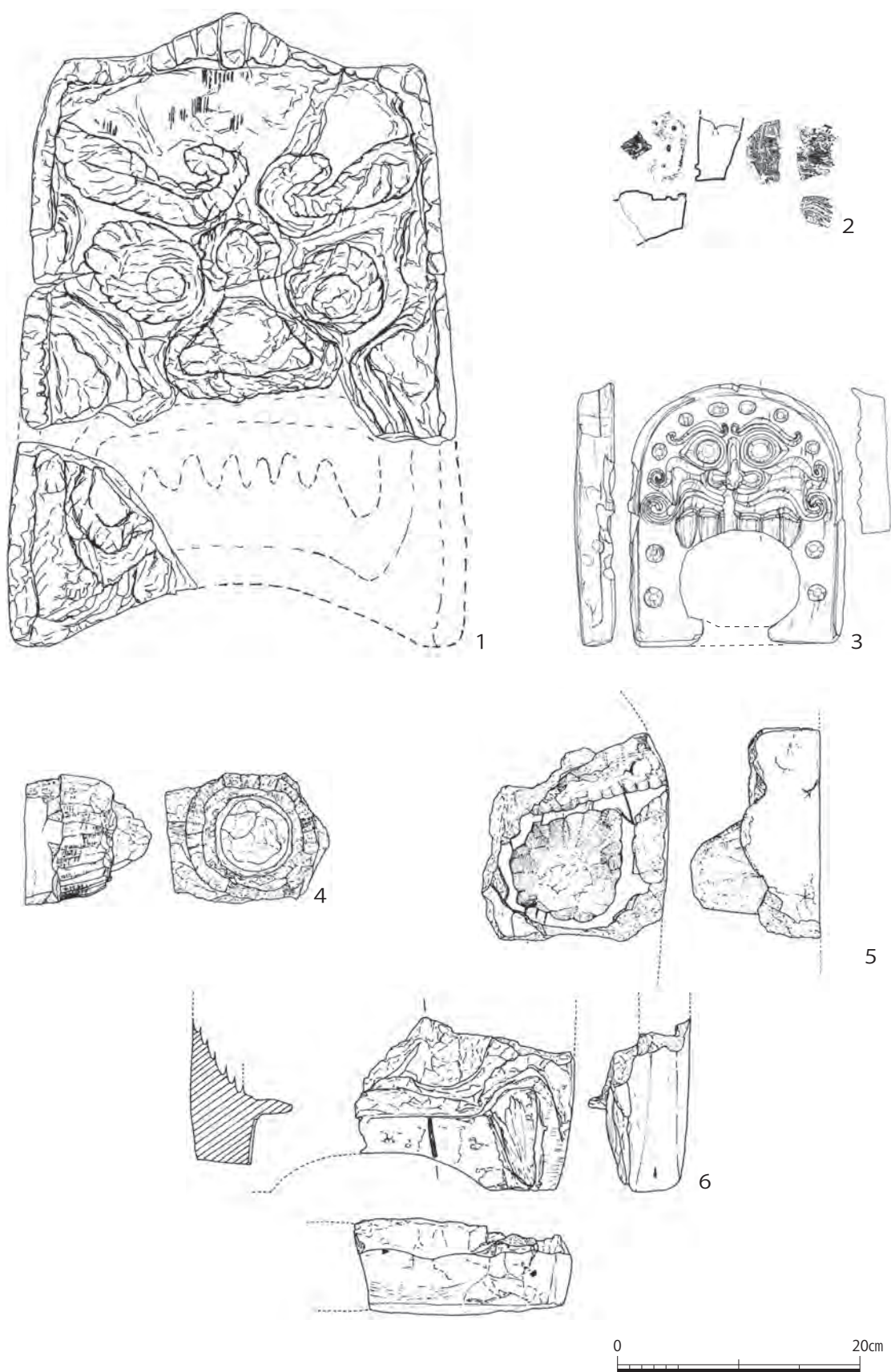
- 石川県小松市教育委員会 2005『小松市遺跡発掘調査報告書Ⅰ 二ッ梨豆岡向山窯跡・狐山遺跡』
 津幡町教育委員会 2007『加茂・加茂廃寺遺跡－第 1～12 調査区の詳細分布調査概要－』
 石川県七尾市教育委員会 1986『能登国分寺－第四次発掘調査報告書－』
 加賀市教育委員会 1980『高尾廃寺跡発掘調査報告』
 北陸古瓦研究会 1987『北陸の古代寺院』 桂書房

図版出典

- 第 1 図・第 2 図 1：石川県小松市教育委員会 2005。
 第 2 図 2：石川県七尾市教育委員会 1986。
 第 2 図 3：津幡町教育委員会 2007。
 第 2 図 4～6：加賀市教育委員会 1980。



第1図 ニツ梨豆岡向山窯出土鬼瓦（1：5）



第2図 石川県出土鬼瓦（1：5）

（1：ニツ梨豆岡向山窯（復元図） 2：能登国分寺 3：加茂廃寺 4～6：高尾廃寺）